特集をするにあたって

土木学会誌編集委員会

“秋深く本読む人の美しき”

いわゆる情報革命の波のまにまに，本の相対的価値が下がり，本を読む時間が誰しも減っているのではないかと思う．学術的知識の伝達手段も，最近はスライド，テレビ，テープなどが普及しつつあり，それに反比例して，本を嘗めるように愛でつつ，じっくり取り組む姿勢が揺らぎつつあるようだ．

一方において，出版洪水，文書による情報氾濫の傾向は少しも弱まりそうにない．なればこそいっそう，われわれは情報をよりわけ，良書を選ぶ必要性を痛感する．そうでなくとも，日本のインテリは大学を出るとスポーツ紙と週刊誌しか読まなくなると，以前からよくいわれている．いやこのごろは大学生さえも，試験の点数獲得に効率の良い教科書や参考書には目をとおしても，それに直接関係の無い名著や古典に体当りする意気込みが，とみに衰えてきたとはいえないだろうか．さらには，土木技術者は，設計や施工にただちに役立つ公式集やハンドブックはよく使うが，それ以外の専門書や，いわゆる名著や古典，さらには境界領域の図書の読込みが，他の分野の技術者よりはるかに少ないとの風評もしきりである．

本特集“誌上図書館”では，まず“土木の名著”について6人の碩学から寄稿して頂いた．そもそも名著とは何かについては，無数の定義や見解が披瀝されてきており，その解釈にはかなりの幅があるのも無理からぬことであろう．編集側から執筆者に依頼した“名著”は，土木工学を志す機縁となった著書，つまりその人の職業的人生を定めた本，土木工学の基礎を確立してくれた本，あるいはつねに座右に備え土木家としての人生の師と仰ぐ図書，もしくはそのような観点から後輩に自信をもってすすめられる本のご紹介であった．そもそも名著の定義が確立されたものでなく，執筆の方々の年代や体験も異なる以上，名著選択も最終的には主観的判断に委ねざるを得なかった．したがって，それぞれ名著選択の基準も異なるようではあるが，いずれも深い経験に根ざした優良書が，まばゆいほどに展示されている．

工学のように日進月歩の学問においては，古典というべき名著は存在しにくいという意見もあろう．しかし，偉大な学術的業績をあげた学者が，自らの学問的体系について英知を傾けた科学技術書には，巧まずして滋味に満ち，行間に深い学識が香り高く凝集しており，広い視野と透徹した論理が伺われるものであり，それは時代を超越した評価にたえるものであろう．ガリレイの新科学対話やニュートンのプリキンピアにまでさかのぼらずとも，例えば，Lord Rayleigh の“Theory of Sound”

(1877 年) などは，およそ力学を武器とする人びとにとっては，おそらく永遠の名著であろう．いうまでもなくこの著書は，古典力学を振動系に適用した書としてではなく，古典力学の透徹した集大成として評価されるべきであろう．Layleigh はエジプトへの新婚旅行の航海中に書き始め，約 5 年間で本著を完成したという．さらに，われわれの身近の古典としては，例えば，ご存知の Stephen P. Timoshenko の "Strength of Materials" (1911 年) があることは説明を要しない．

わが国の土木分野で永遠に光を放ち続けると思われる名著に，土木学会編の『明治以前日本土木史』(昭和 11 年) を加えることを忘れてはなるまい．江戸時代末期までの土木事業の展望について，これをしのぐものが将来現われることはないであろう．本書が昭和 48 年に復刊されるやたちまち売切れたというが，実はそれを買い求めた過半の方は文科系であった．本書は時代小説とか時代劇関係の人びとにとっては欠かせぬ史書になっているといわれる．土木学会編『本邦土木と外人』(昭和 17 年) もまた古本屋で高値がつくのももっともといえる貴重な文献である．特に本書が米英を狂的に排撃していた第二次大戦下に出版されたことも，一種の名著の条件とはいえないだろうか．物部長穂著『水理学』(昭和 8 年) も，わが国における水理学の生成期といえる昭和 10 年代に土木技術者のバイブルといわれた実績は，土木工学史に永遠に残ると思われる．これらは一例にすぎないが，風雪に耐えうる名著の意義をわれわれはあらためて沈思すべきであろう．

ブックガイドは 11 部門について，実用的観点から概観的紹介をお願いした．各専門分野ごとに原則として現在われわれが入手可能な範囲でのレビューであって，このブックガイドは，すでに何回か会誌上において掲載してきたのであるが，現時点で再整理したものである．ご参考までに，従来ブックガイドとして誌上に現われたものは，表に示す 13 編である (別表参照のこと)．あわせてご利用頂ければご便利と思う．

近年，工事完成を記念して工事誌を編集する場合が多くなっている．工事誌の好例として『小河内ダム工事誌』編集の苦心談，内輪話なども担当者に特にご紹介頂いて，これから工事誌を読む人や編集する方々への参考に供したい．なお，やや異なる観点ではあるが，"土木と小説の世界" も多くの会員の関心を惹くものと信ずる．そのリストを眺めると，かくも多数かつ多様に，土木事業や土木技術者が文学界において題材とされていたとは驚くほどである．

『土木学会誌』既発表ブックガイド一覧

著者	部門	学会誌登載巻号
大嶋太市	測量学	Vol. 54- 1, pp. 124～
前田幸雄	橋梁工学	Vol. 54- 4, pp. 64～
松本嘉司	鉄道工学	Vol. 55- 4, pp. 70～
枝村俊郎	道路工学	Vol. 55- 5, pp. 90～
岩佐義朗	河川	Vol. 55-11, pp. 80～
木村孟	土質工学	Vol. 59- 7, pp. 80～
吉川和広	都市計画	Vol. 59- 9, pp. 68～
越正毅	交通工学	Vol. 59-11, pp. 78～
高橋彦治	土木地質学	Vol. 59-12, pp. 66～
服部昌太郎	港湾・海岸	Vol. 59-13, pp. 70～
斎藤徹	トンネル工学	Vol. 60- 1, pp. 107～
福本暁士	応力・材力・構力	Vol. 60- 7, pp. 80～
倉西茂	橋梁工学	Vol. 60-10, pp. 74～

一般の方々は，土木技術者をモデルとした文学などによって，土木とその世界を理解することが多いと思われるので，われわれとしても土木事業や土木技術者をテーマとした名作が次々と現われることを期待したい．

小説ではないが，例えば小中学生向きに書かれた有馬宏著『トンネルを掘る話』(昭和 16 年) とか，内村鑑三著『後世への最大遺物』(明治 27 年) などによって，土木を志ざした人，あるいは土木への理解を深めた人は，一時代前には相当多かったようである．寺田寅彦随筆集もまた，土木技術者にとっては，土地や水を読む基本的考え方を与える書としても重要であろう．同じような意味で，和辻哲郎著『風土』(昭和 10 年) を読み返しているという話もこのごろよく聞く．これらは，もちろん土木の名著ではないが，土木技術者にとって読書の味わいを深めてくれる古典となってゆくのではないかと思う．

「座談会・技術書が生まれるまで」は，著者，編集者，出版者，読者それぞれの立場から，土木技術書のできるまでの内情，注文などを織りまぜて忌憚なく話し合って頂いた．本を書く人も読む人も，ここに語られている状況を知っておくのは決して無駄ではないに違いない．

なんともあわただしい現代，心静かに読書に耽る時間は案外少ないかも知れない．なんとか工面して読書の時間を探す習慣を身につけ，充実した読書人生を送りたいものだと思う．それにつけても，悪書は注意力を散漫にし，読みごたえのある本に取り組む意欲を失わせるということを忘れてはなるまい．

本特集によって，会員諸子が読書の意義を再認識する機会となり，良書選択にいささかでも貢献するならば，編集委員会の歓びこれに過ぎるものはない．

"One man can lead a horse to the water, but twenty cannot make him drink."